松浦佐用媛石魂録

集巻之五

へ13
3240
5

へ 13
3240
5

昭和十年七月九日

松浦佐用媛石魂録前編下巻

東都　曲亭馬琴編次

第九

龍神洞に孤客命を知れ

太宰府の守護平経高が股肱の家隷に。牛淵九郎清繩といふ。そのあり
けり。原是何ホの人なり。とその素姓知たづねられぬ。父を蜻平馬清廉とて。
三浦泰村が譜代の郎黨。忠義毎に二のなりし。ありれに泰村を。後深草
帝の御宇。宝治のころ。北條一家の威權に猖を。謀反の企ありしころ。清廉
もだしがたく主を諫て。終に用ひられざるが。卒馬いさく
られを歎て。忠臣面代犯して。君代諫うに。その言用ひられず。縱眼睛を東門
に掛れども。又何の益ぞ。只身代殺して。君がこうふかせれ孽に讓ひ
除んとぞ深念し。一封の遺書を家とぶめ。腹かき切て死ぬ。清廉が死後

ふ。彼遺書に投露ありしくども。泰村絶よ遺意におりしくぶさん氣をこし。
きつはれ。その殿忠に憑とけん。清廉が呼くりの子ども に扶助し。恩惠頗
厚かりけり。さるに行に宝治元年六月五日。泰村戦頃ふ親族ふ令く軍兵
に召集。執権時頼朝臣の宿所へ押寄く。稍負を一時ふ決せんと計較る
が。緯忽地ふ發覺て。その日の軍利わるくして。泰村父子う従京して法華堂
に引退て。こゝ悉自殺せり。かゝしば。岬平馬清廉が子ども。冢子ハ女児
ふ。次男に淵九郎といふ。年ふ尼幼たる。母ゝそ去年の秋月ゆゑ。父ゝ
この春自殺ぬ。ゆゑなく孤ふなれふ。主家ふ滅亡しつ。謀反人れ餘類
ふ。ありとて。日夜親しきにも疎まいくぶ。せんとなりしば。同胞泣て鎌倉
に逃ひ出。些の由縁に便りて。接明尼が崎に勢た浦人の奴婢となりて。
世に おくりけり。ゆゑにわれと十年ふ。艱難憂苦の中に人となりた

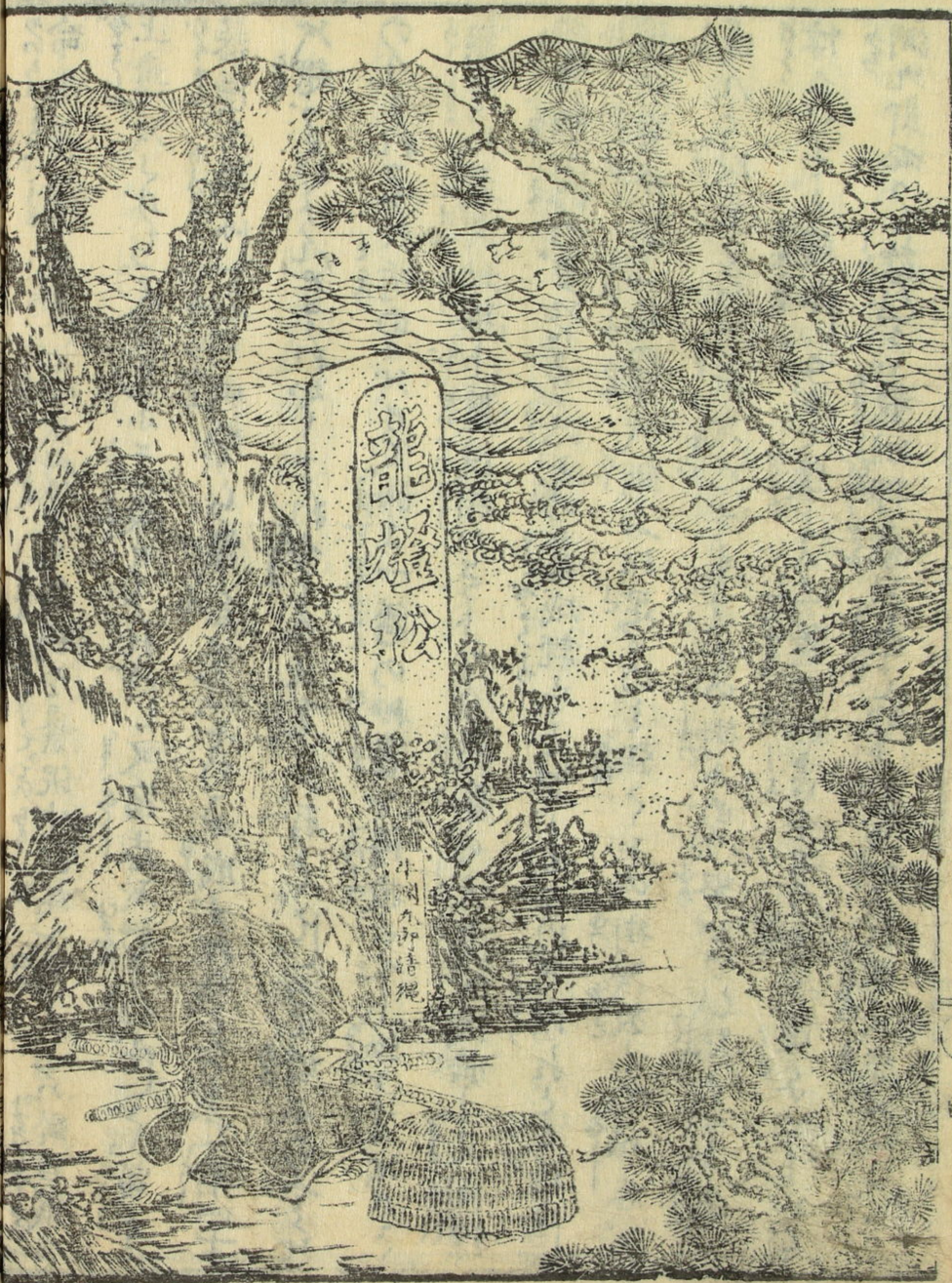
けれが。淵九郎ハ雄たりつその志逞しく。潛ふおりふ母うつゞ身命奉ふ
ゆゑ。浮世に拔ぬ。かく民間ふ零落しも。人の奴僕となり。紅人ふに撫投せら
れるといへども。父ハ泰村めしれ忠臣なり。加藤三浦岬を。元親族ふ。外様
の家隷とふ思ひかゝ。されば。これいふもして鎌倉を攻滅し。亡君の仇と報
つゞやと思ひ定め形ゞ。姻ふハ名中の機密をきふせて。われ日同胞。人ふ
処ふ集合て。行末事かとのゝ代語りけゞくれ序ふ。淵九郎がいふ。姻
ふハ年も。これふ十四まう増く。ふ人ふれば。昔鎌倉にありけれ日ふ。恭遜
も。ゆゑく記てぞおのゝふ。つゞ身を何ごとも爰の如うにて。父母の面影
ゆゑ人。定うふハ紛ふいなどさしも。三浦の忠臣と。ほゞ。ふ人の子として。風
に吹ふ。ふれ。いさゞふに浦曲の挿かゝ。生涯ふ。ふ。ふ。
國ふハ。菊池原田なんゞて。名ゝ武士も多ければ。同胞ふ。彼地ふ

おりしも此縁にのとゝ主どりせどやとゝなり。おのひとりまゝ也といふ。
姉も年頃淵九郎が志大也して。ものの用にうるさきものなりとゝ云れば。
かゝゝ。ゝれば計らひ人と奉りかゞ。淵九郎大に歎び。主人に故郷へ立ち
親族に對面して。父母の墓へ詣て後に。又帰て来べき也なりいひ置へ。
ゝゝ也の暇をゝられ也といふ。主人ゝ。彼本年来信かに仕ゝれりの
形れば也ゝ。ゝ給ゝ。ゝ故。東へ道もゝゝけし。見りてゆたねて。路費
ゝゝにゝゝ。ゝ。同胞いゝ。ゝ給ゝ。遠ま尾ゝ待と旅ごち。
東へ赴て。只顧西に斧てゆく。日に孫へ。長門なれ赤間が関ゝぐ
ゝふ。ゝ。ゝの津より。便船ゝく。豊前の小倉へ渡らんとしけるゝ忽地
姉を見うしなひて。ゝに驚て。彼此を索ゝ。その日ハ遠ま私に乗ゝ。
ゝの日も。又浦曲ゝ。牛崎室津畑住新五宇加藤と神田河川の濱

濱に索呻吟。是者彼首ゝ。二ゝ日と費ゝ。終ゝ姉ゝ環會ゝ。
に至ゝ淵九郎ハ。ゝふ後悔。ゝ不幸ゝ。父母に喪ゝ。姉の長貴
を受ゝ。その恩父母ゝ異ゝ。ゝゝ。ゝれを。青雲の志已ゝ。遠く西海に
漂流。ゝの外に同胞離散して。姉の往方に尋ゝ。ゝれば再會を
又計ゝ。縦一旦ゝ。ゝ。蘇張が列國の印に帯ての日ゝ
ゝも。姉の高恩に謝ゝ。ゝ。益なれゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。津國を漫に迷ひ生ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
神明佛陀の冥助に祷ゝ。姉の往方に尋ゝ。ゝ。
この日ゝ道ゝ。ゝ。大小の神社へ。ゝ。ゝ。祈念を凝ゝ。
ゝ。阿川のゝ。向ゝ。ゝ。長ゝ。海へ。偏ゝ。ゝ。ゝ。
ゝに。龍神の洞といふゝ。又龍燈の松ゝ。いとゝゝなれ松ゝ。

渡海の船。風濤の難ふかくして。たへがの洞門に難をのがれ。
はし。浦人の物がたりを。淵九郎不圖ゆく。遽く件の洞に入て祈願す
ること前のごとく。殊さらに丹誠を凝らしけれに。頃しも三月の下旬なれば。
海上日和おだやかにして。風景えもいはれず。長途の疲労にむかひども。彼龍燈
の松が枝を枕として。ちゞに目睡たる枕辺に人ありて。淵九郎くくと呼び起す
声せり。ふと目を覚ませば。白髪童顔の翁端然として。傍
なる巖に腰をかけてあり。被る衣も海松のごとくかたく垂れども。その文
そ。いとゞ美しく明らかなれ。錦繡の類ひや。光曜くこと。魚の鱗めいたるかと
ばかりなれ。朱よりも赤くて。珊瑚か彷彿たり。淵九郎ぬく怪しみ。その
翁を見れば。人のうしと思ひ〳〵かば。岸破と分れ紀して。そのほとりに踏躇しつ。
翁は熟と淵九郎を視たりしかと。壯佼汝は志ありなれども。惜らくは
命運基薄〳〵。志成難しとく。名利を棄泥中に尾を曳んは。鯉百歳の
上壽ばかりなり。人の爲ふる敬ひとれば。又宿志成難しとく。頗る
暴慢を放ち。名利両ながら懸念せば。その成ぐれのこうとで。年四十
代越ぐとかくんとまれかくまれ。今より九年成孫く。じめて姻ふ
あり。これそれ所のなりて。汝は一巻の秘書を傳授すべし。汝が才成りて。
熟讀は。天文地理。卜筮說相はさらなり。兵家の大支を開悟し。又間諜
の奇術をもつぎたなり。只その業成就ととゝいへども。これ成用ととなさし。
僅ふ貴ぶして。一已の口成鯛ふに足るのみ。強くその術成放して風志成
遂んと欲ぞとなれば。身成亡ぶもまた其術ふあり。努おろそかに怠ること勿れ。
悔ることなかれと說示して。ゆゞて懷より。一巻の秘書をとり出さ遍与せり。かの
淵九郎恐く拜びて。數回押戴して。某ばかりなる賜成受ふ。ぞ

龍神の洞



箕閭よ吾ひハべし願くハ我が縁明白に若氏を志らしめ給へと一心に祈誓
して。これハ名もなく家もなし汝が先祖の因あるをもて言とゝに及ぶのミ
といひもをハらず白波高く礒を洗ふて叢と群る水鳥ろにまれ翁ハ忽地
金光をそなへち打くる浪を踏ぐ。往方も志れずなりにけり。淵九郎ハ忙
然と為ずし其方を目送て。これふもめくらでつい彼の家附に海上浪おさまりて
夕陽西に没んとしぬ。そのゝち淵九郎ハ。小膝を礒と拍げみと思ひ出すことと
こそあれ。我が曾祖ハ。三浦介義明の末子なりしが。その母ハ日岬の礒辺に
猶びく戯をなせるがあり。終に有身て産れし子の腋下に鱗ありしかバ。これ
かならず龍神の子ならんとて岬龍村と名づけられはし姥の物がたりあて
ありぬ志られ汝翁その名を聞ねて。汝が先祖に因ありと答へしハ疑ふべく
もあらぬ。龍神なり。これ又向後の吉凶を示されしならん命運の熟ぬをあり

ながらふるほど太守が思ひ企るとも頼りがたからん。已なんことひとりごちて。遂に
風志を賜し。只世の安ふに於くらんと思案しつ。直に九州に経歴しつゝ。潜に件
の秘書を熟讀し。中に發明されし事ありて天文地理。卜筮説相軍学の
奥旨。間諜の奇術をよくしたといへども。龍神の教ありてトふにも其の術
を施さず。由りて筑紫の太宰府に到り。岬淵九郎を更て牛淵九郎清縄
と名乗り。賣卜して生活とせしが。そのトどこ多。露ばかりも違ざりしかば。
の程人皆かく驚歎して。今の世の指の神子なりと稱賛せ。されども清縄ハ至
謝儀を受ること。僅に十銭と定めて。その餘を貪らず。只管清貧をたのしミ
て。かくてありける九年に及びしが。太宰の経高謀反の企ありて。そハた
て一藝ある者を扶持されに。清縄が卜のよきをきゝて頻に之れを招けども。
牛淵九郎ハかたく推辞て招れにも應ぜざりしを。経高なほ禮儀を厚くして其の使

節三度に及びしかば。牛渕九郎脱かに言捨なく。とさまかうさまおりひしゆえひしが。年來筑紫にありて世にきこえもありけるに。威徳ある人に招れて下りしものなれば。これを辭せんは却失敬の罪を責らるべしと思ひて。遂て城中に赴き。経高が老臣に就て日來の恩恵浅からざるよしを述ければ。経高も牛渕九郎が來れりと聞て大に悦び。やがて城中に留ること三日。さまざまに饗應さし。老臣らもかくれて利害を説ければ。守護の渇望に應じ給へ。かくても固く推辞ありしが。生涯この城中より外へ出じといふ。清縄はかく叮嚀なればに心よくおぼえて。己をかくまであがむるに。主君と頼をなすべしと慮り。ける程に経高は牛渕と後廳に呼入れて對面し。見参の引出物として鎧一領太刀一振鞍おきたる馬一疋を賜り。てづから盃をあげ。饗應初めに倍増せり。されども清縄はほどなく経高が相を見るに。謀反の氣ありしかればく。されども事を遂ざる人にあらざれば意の中大に驚き。早晩後悔せしかど。既にその折に應じて言下にこれを違背せば忽地に罪せられんことを。爾後の胡亂なる也。それおのれもいよいよ猜増し恨を算くさるゝほど嗟嘆して命運の係るところ今はかうよと思ひ遂に志を傾て仕しが経高畢竟いくほどなく謀反を起し。清縄をもつて軍師となされければ清縄は織に臨變に應じつべく謀を述ければ。経高もその人となり識量狹く人を疑ふ決断なかりければ。その謀を用ひず。清縄大に焦燥て手勢僅に二三百人を率て肥後國に押渡り。菊池原田を攻撃し肥前の平戸浦に屯して暫時九州に振へり。されば北條上総介實政執権時宗朝臣の命を禀て鎌倉を進發し。船路より肥前國に赴き。矢田の津に陣を布直に清縄を討んとぞ。清縄縁由を以て實政の軍配侮がたく思ひしかば。逃しあへず

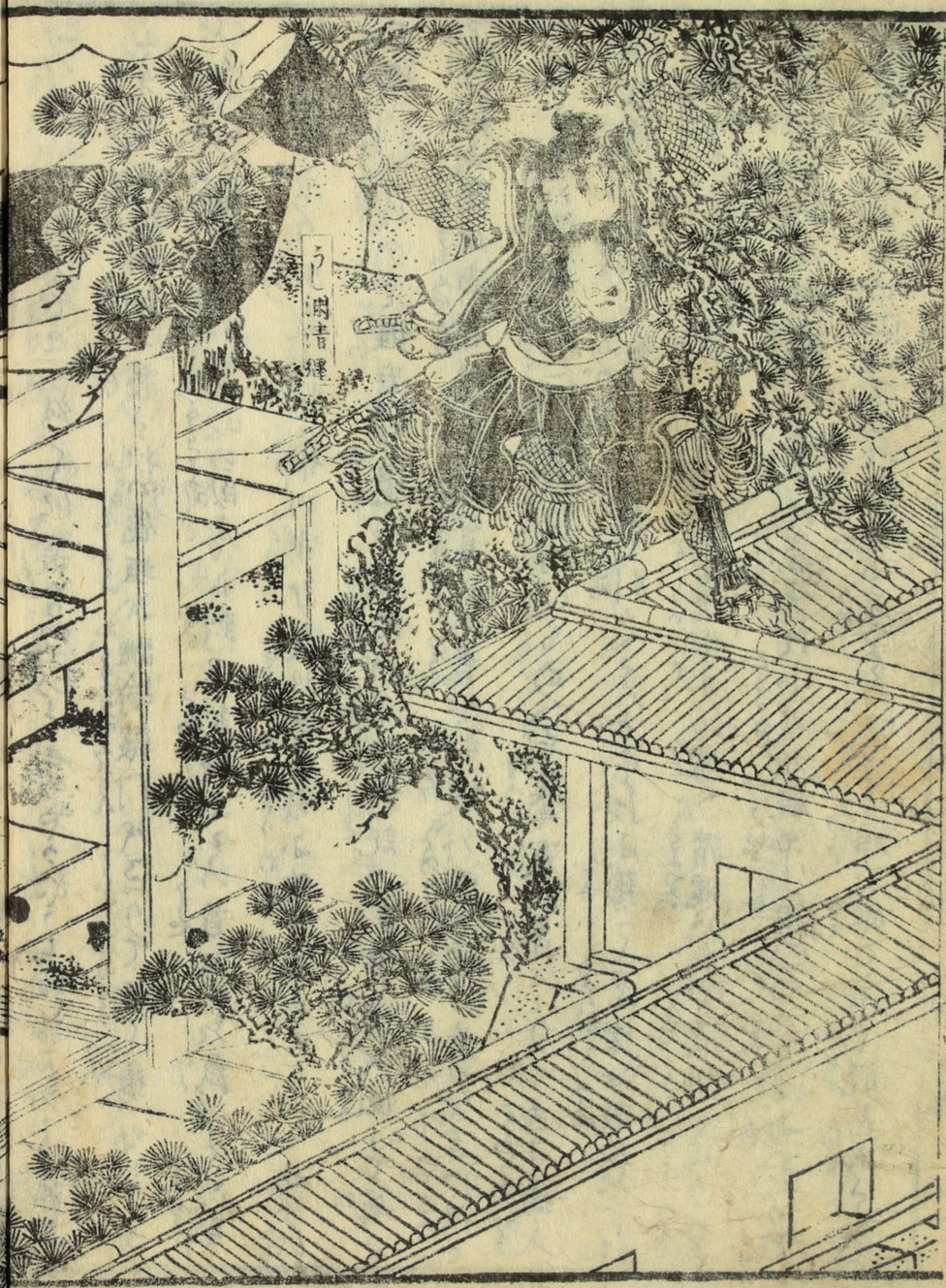
戦ど。両陣巨海を隔つ。疾視あひてゐこばらに日をふ。やその年も暮てゆくなの春立ぬりかけれど。寒さ冴まうて。雪降つゞをられへ敵の矛方もいと徒然よ堪ぎ。ちのとを瀬川采女吉次ハ。大将実政ゐ密語ていうるそ。灰聞牛淵九郎ー清縄ハ不測ゐ間諜の術をゐうとかん彼去年ゝうと一ト度びも苦せ来ざれハ。必定別よ謀ゐ好るゞし。常言に。芭外の犬ハ。ゐは防べ。壁隙の風ゝ禦ぐ。といへり。牛淵尚潜入ゝ不虞のるゆゐふ。腑を噬ともゝ及ど。大将ゐハ。今霞ゝり某と臥房を換ゝ眠ゐ人ゐし者に子密が便室の褥を脱ゝるふべゝなゐと信ぎていふ。実政ゆゝてゐじ尋思し示さうゝとゝ理ゐれど。ちゞ先偏ゐけゝれゐのちらゐゐは不仁ありといハぎゆ。ゐの敵ゐ方の厄難を避んとて。人ゐ危ゐゐ代ゝるゐハ勇ーこのせざれ所なり。回答て。兼引まゝるゝしかば。次ゐゐは近曽陣中に謀ゐりゐ

死刑を放ー。是ゐりてゐゝしゐ。かくゝれとゝれハ。その人牛淵ゐ為ゐ命を隕さゝれとも恨なゝれど。ゝ幸ゐて。厳の刃ゐ脱なゐ。九死を出ゝ一生ゐ。なゞ自の罪ゐ贖に足ゐんまゞて。ゐ計らしゝ人ゝしといふゐ。実政ゐうやく落ゐひて。近曽令と犯ーて。その罪死ゐ当るゐの。年紀貌粗大将ゐ八月なれと擇ゝ陥して。その罪を放ー。密ゐうに緯の縒ゝ。そのゐの故ゞ金ゝを稟。毎夜ゐ大将ゐ代ゝく。その臥房ゐ睡りつ。吉次又壮士二三十人。帷幕の中ゐ伏て牛淵ゐ待ゝ。ちのゝび入ゝ。ゐハ引裏て結ゝるゝべゝはしゐ。ゆゝえゝゝしゝ。その身ゝ虚居のゝゝ少ー引入ゝれ処ゐ直寝ーて。通骨聯ゝ。実政又士卒ゐ下知ーて。毎夜ゐ舞ゝ焚ー。ゞゝら四隅をゝら巡りて用心極て堅固ゝり。ゝられ行ゐ牛淵九郎清縄ハ。去年ゝり飛蘭渡ゐ。ゐゝり好ゞら。実政の大軍ゐ北ゝゝ。ゞゝゞ裏ハ十ゞ二三ゐて。勢ひめゝりゞゝ。ゝゝば。敵の勢ゞゝれを焼悩ゐして。一ト度び

も動かざりつ。つくづくと思ひめぐらせるに。経高が賜はれて。龍神の教誡ふ時。
遂ふ五斗米の為ふ腰を折れのことなれば。此度の大事は奥りて。百戦百勝の
奇計を述べれふ。経高暗愚ほしてこそえて用ひざれば。彼人浅代恩顧に家
隷ふもめぐりねど。とても かくても死とぞ定まりぬ。せめて北條の親族なれ。実政
と聞きしうて。古主泰村朝臣の寃魂を慰めまゐらせ。その志を遂げまゐらせ。
且経高が一の謀反を起せりと怒るべし。実政が家人の所給度場の
戦せば。寡勢なりて衆に敵しがたし。只夜ふ紛れて潜かに実政が首を引提げ。
走り帰りなんものと。深念し。腹心の兵士ふ機密を伝えもとめて。陣中
を守らしめ。頃は正月九八日の烏夜玉。茅ヶ崎の陣ふ出て清縄いと
ゆかく打紛れて。只一人小舟にうち乗り。矢田の漆ふ漕ぎ渡りて。小夜
深れば比及ふ実政の陣ふ潜ぎ入れば。雲ハ半もく陣るかごとく。番次の兵士。

ものどうら解アて。とこ絞くに集合つ。いとあやうきこと。相治声のまこ清縄
と。元来間諜の術ふ長ぜれば。鹿垣を跳踰轅門ふ入りて。輙く奥ゆかく忍
び入りつ。遂ふ大将実政の臥房ふ到て。忽地ふその首を掻落しく。沈鬢
かい細て走り出ふ。惟幕の中ふ残れ壮士も頻ふ睡を催してこれと戦ひ。
只瀬川吉次のみ。睡魔ふ退け。孤燈の下に。史記の刺客傳を閲して居こ
ろ。忽地癖者ありて。假實政の首を引提げ外面へ走り来ると。吉次怪と
思へば。吉次大ふ驚て。太刀に著くれ。小刀ふ脱せ。追ひつ。丁と打かけ。
清縄と抱くもせびして。これを袖ふ受ぬ。ゆくり頃と踏こえく脱と出ぬ。

せゝらぎ



この胖響に宿寝の壮士番次の兵士おどろき驚き、甲冑器械をよそほ
追蒐んと聞く所。吉次えうえうと。牛淵をぐ。これ追留て撃とうぐ。おのく
々ゆく路と断ふくて。這奴と飛蘭渡へ帰さるべきにも配ちうへといひけ
て角門を押開て。飛がおくくに追くゆく。大将実政縁由を尋て聚て謀つる
事なれば。俄頃ふ軍兵ども三まにてうたる。その一まハ清縄ら追ぎ踏を遮り
留さし。又一まの兵士ハ踏ーてめて。陣中を守らし踏れ一まの軍兵ども和て。直
に飛蘭渡へ押ぎうり清縄が陣を攻破りその屯ふ拔んとて馬ふ乗りとうら跨。
鞭を打ーし。泳雪を踏ー。擬ふ捧ぐ走出ハ主に劣らぬ壮士ども後ぜ
と引ちふたり。かくて瀬川采女吉次を頻りに牛淵清縄を追蒐ぐ。同追く
なれ行に。牛淵ハ疎林の中へ走り入りて。忽地又えを求しうば。吉次ものく焦
燥ぐ。雪に印ぎれ足迹と葉ゆしをは何知ずと追蒐ぐ。牛淵九郎
清縄ハ。輙く実政を奪ぎうれと。おのひーかば。敢戦を好ぎど足ふ信ーく脱
走ぐ。ゆくくに烈ーく追ぜうば。彼と遣ささやとおりひて道もなく山路ふ
向ひてうぎくに足跡を彷ー。返進ーて立後ぐ。道ふ横ぎて径ふ分ぐ踏ぐ
雪ふ埋めけ。ゆくくに吉次と出ー様て。直ふ飛蘭渡へ帰らんとすれふ実政
の軍兵。ゆく先ふ充満ぐ。遂ふ帰ぐうふ紛ぐど。夜ハほのくと明ぐうて沖の
方と佐とーれハ。飛蘭渡の陣もて攻落されねとおげくて。水ふ投て飛ぐ
ふ。瀬川采女吉次と。清縄ふ対ー。疑惑ひ。躊躇ーておりふう。実政の軍
盤ふ。年弱ぐれど。智嚢弱常にめくぐ軍急
孫呉を学ぶとぜ。果して敵ふ倣ぬりー大将実政撃れらふ陣中
以の外ふ騒動ぐて。却ぐが攻れ話と遮り留め。主将のなれ式ぐ。
飛蘭渡と攻奪ぐれ軍配甚奇ぐう。あれバこの首も実政ふをめくて。

質物のありけるとて。ぱらぱらと取出す林首なれど。その骨相西夫の面影ふ
ちく。大ねの首級よりもふ。そは謀策られたる杉をさよ。と知りつこらて。
躊躇されともそのひは。こに至つく。いて龍神の教誡なりと錯
ざるとと感嘆し。嗚呼これこれ死んこと。いつく。合ふされ者と雪中に撲地と
投捨又遺ところてかへし。末の龍華のかへ走りけて。

第十

末龍華ふ親族全く聚れ

明ぬとば正月九九日の早天ふ北條上總介実政ふ瀬川乗女ふ謀まころく。
牛渕が森蘭渡の屯を撃崩し討これこと紙の首級と砍集。さく晴
ず号の蜂鞭をうて。矢田の身方へ走しけり。かくしこ瀬川吉次へ清繩が
陣。既ふ破まこれをちつく。ほもく勇こ。頻ふ牛渕を追活く。はま
ちぶんとてなは彼此と熊徊されふ。野も山も白妙の深雪の外ふ物も

きく。年てゆくかこもおぼつかなくて。不意も末の龍華ふ迷ひ出ろ。通霄
走りこれふ。いこく餓て寒怯がとければ。道次なれ。草舎ふ立よりこく。鍋
なれば折戸をほこくと打敲ふ。裡より老女の声して。誰と問。吉次答こ。
これハ深雪ふ道を迷ひて。識ふ偏れりの形り。ちぢし慰こて。一碗の粮をめぐ
みの人翌をかるふ厚く報ひさべとふと。件の老女も哀と呵し
とうち笑ひ。めるこぶ子。やはりなれ欲。いつまで童めこれはこなどして。
老これ親を敬こと。ねぶぞとく。裡ふ入れしとふふ。吉次ハそのこ流を
聞ている。これハ近曽東よりまれるのなり。ちかこそ。西なるのかいこれいな
でう人を訪くぞこと。と呟けば。老女そ牛こくこら笑ひて。汝ハ叔父よ歟んと。
酒を買ふ出これる。人ものこめて。ちづいく酔こるよ。ある鈍牛ゆ年耳
耳なれこれ。こぶ子の声と女悔こものこ。用よとかくばなどて明白ふ

えぐ[illegible]。この雪れ寒くいるる[illegible]。嗚呼の白徒うるといひ懲しつ。荒[illegible]庭ふ掻捨くる。雪の中道を。木履穿ちて歩く出。[illegible]折戸を開かんく。吉次がこえかうえつ。怪しや声も面影も。紛ふるくもめくねるぶ子なれど。[illegible]身は腹巻をし。小手臑当ちうれ。武者態のいと勇さよ。この暁ふ花薗渡に戦ありと[illegible]れが。落武者の物れ具ふ剥ちりてやまくれ。て後ある人を。道ふ迷くるく人拾ひぞ。ちうれ[illegible]彼人の後率とちりぶがら。引剥されぬ[illegible]獣の公かり。とくりて。ゆきて。ものめーへ返さんい。えとそ裡へ入見とて涙さし[illegible]。怨ぞれい吉次ちとく呆果とう狂人かりと猜してのくそんぞ。微笑て云ふう。老女ぞけ。世ふい似くれ人数あり。神の代してい天稚日子の。阿遅志貴の神に似くれ人の代はしてい武内宿称の。壹岐直に似くれ。あるい孔子の陽虎ふ似くれ。何尚之と顔延之が猴ふ似くれ。他人の猴似といふも是ちう出ちう。れい

雖ふ似くれうい[illegible]ど。東軍の軍監ふ瀬川采女吉次と[illegible]。会暁敵将牛淵九郎清綱を追ふて途ふ[illegible]れとえ[illegible]。漫よとく[illegible]ちう。ちどし想して。濡れ衣をも乾せよし。大将軍に[illegible]て十二分の覚をとぐ。いうふとくふとくりやといふ母。老女ハ姫くび吉次をとそんかうえくぐふ[illegible]なり。東軍の軍監瀬川氏と宜ふれい何とかくんと[illegible]ゆしし。瀬川健三道孝といふくの子ふ。乳名松太郎と[illegible]れ[illegible]。と問ふ吉次ちもあくど。れその健二道孝の家子松太郎と[illegible]なり。[illegible]ハ実母。[illegible]ちくおりぜ。[illegible]れことその玉[illegible]。[illegible]ざれ再會ちり。と互にまよまとりあ。母ハ水江の浦潟ぐ子の塩[illegible]。[illegible]ハ又宋の朱壽昌が母よあひわ[illegible]。[illegible]なり。そのとれ玉[illegible]ハ扶ふ堰ふし。目水とぐく押拭ひ寔に親子乃

因縁竭き。命めり春なりて。かく環會喜しさよ。うぐ牙ひし浦二郎とくもに。
との列ふ弾り火玉。縁由を爹この物語みて。よくもりてぞ咲とぞ。死離別の後
そ一ドくびも。こえく音づれ。ぜえぞりしハ正室木綿妙どの。為婿を信を世の
中の義理をいとぶ苦しけ。ちれがこの顕身の息れ内あのあはしのあら
ざりけりとそのおりひとやふ端ゑくもあらんとハ。ゆるれ歎たハちふね矢の。
紫の果より薪樵。鎌倉山と出れ月の西へとおりひ流むぶ。その曉の寝覚
夜ゑえて。九年の嬢武察〜多人。雙生ハよく肖りのといどかくまでも兄弟ろ。
多も違ゑで。ガりのうれ。面新のこと。声音までいづれをいづ丑とゑたこしされ
ぞ。浦二郎ハ。ゆりとして。物いひつれを爹ふるお母爹この子あれ
ど。浦二郎ハ野山の掙して。いと寡ちくこれうげるれど。孝行ハ人ふ勝まく
弱きこのあいと稀なり。今ゆもあれゆり来くかくとゆうばさそる故ひ結

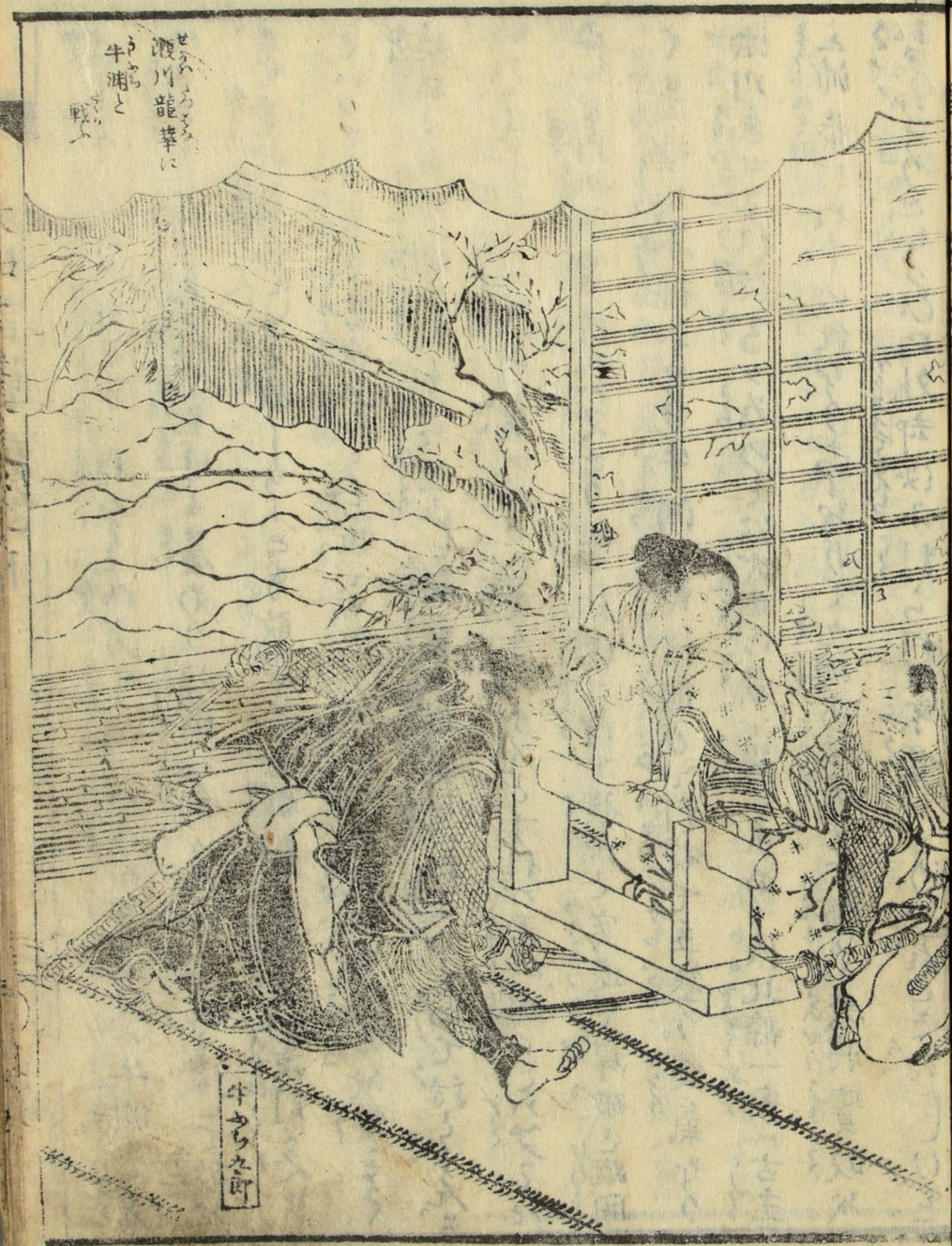
ちぐし。爹くも母れも恙なくて在ちれふとそこぶ年なこのよるふはけても。
いふ老ぐらるひけんこ生くはしはちとかれ口説ど。吉次ゆて。ゆるゆも志くで
ゆちとれハ理なろ。父も母もいはる文永六年の秋れこれ。打つれて世と去り
るひ。某責し北條殿の寵偶を蒙りて。近後ふゆられ。主命ふよりて。近曾博多
ふ四郎が女児秋布といふ少女武聚うつ。ゆられふ太宰の孫高謀反のゆえ
めれふよりて。某軍監ふ擇出され。去年うり矢田の屯ふあり。総角のひしよう。
母のゆ生がゆ。おりひ忘れ隙ハるれど。ゆぶ父ゆがくくて。音新せんゆも待
るるど。父世ふくなるひても。身の勢に遑ゆく。海山遥ふ隔居れハ。ゆふのみ
ふて意ふ仔せヒ。此度不意當國へ来つれとも安かれ。逆徒誅伏の後ゆ。
この便宜とりて。かのふ代尋はゆるゆ。母も貧も。鎌倉へわらくゆるゆうとり
れふ。天つゆ滅ゆと憐こて。仇と遊りしゆふとゆくも。母ふ環會したゆへ。

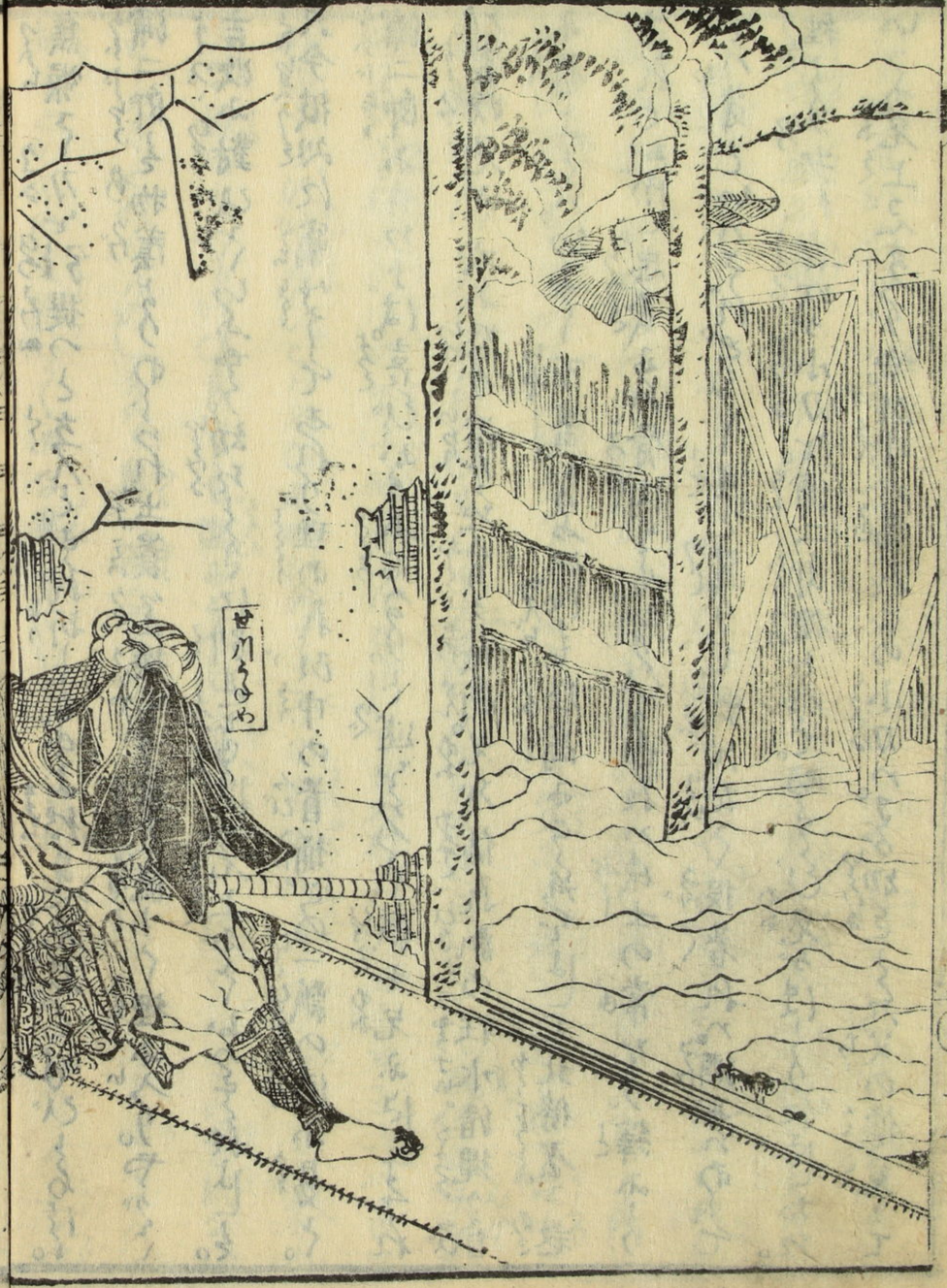
吉次雲天ふ
宿ゞ撰
牛ふち九郎

故びこれ不まことわりと綽審み物かられば玉鳴を健三夫婦の者ども
ア。そもいくらくれ羊と行られと。しめてありて。いとゞ哀悼ふ感ざりて忽地
にいふかう。あまりこれまぶらけ〻ふぶやや。あまりに喜〻さと哀〻さにうち紛れ
て内あさに伴ふり通霄路を走りめぐる。飢も疲労もたゝひけ。まつ足と
洗ふへし。といひうけて。忙〻く庖温のかとへ走り入ア。盥ふ一桶の湯を汲入れ。
これをかりて出ず。斜ふ朽られ竹様のほとりにさしかけ。吉次を押しふふく。
縁端ふ尻をかけ。豊に水りて固ふなる草鞋の紐を解折しも。紙窠を細ゆる
に押開て。潜ふ張ふりのぬりけア。是すなわち牛淵九郎清縄なり。清縄驚て
吉次ふ追ま。彼蘭渡へ入ぬりふと。進退究マて。玉嶋が家ふ宿かり。瀬川ふ
先さらで。おくゆりたる刑処ふあり。ともふぶして吉次ハ目今足と洗ふとは。
盥ふうたる面彩と結とえて刀にまかけ。こて敵将牛淵も。この処ふあり

けれよといひせも果ぞ玉嶋が。盥ばぶがとうち復せば。彼処ふもまこ窠の
障子を内より磯と引〻そうり。まるこ式こせどと玉鳴をこ。涙ふもなれ笑ひ
ふ紛らし。寔に親子の水入ふぶ。今の湯ハあまりに熱〻さハ汲入て進ぜん。
といひつ桶を引提て。さんとさ彩を吉次ハ忙〻く押とゞめ。いる湯ハ欲ちう
いろぶと雪毋細りし覓の水こそ潔け旦。とさしよせく。盥に受る滄浪の水
なる〻好くにつぶ足洗ふ折しも浦二郎ハ拂もあくわ雪の蓑の下に飄て
携て。ゆり来つ。とこ入れ〻に又ひとりは賓あり。て裡の容子の平ゆとれを
不審こ左右なく。足りも入ふぶ折戸の蔭ふ立在て。ちぶ窺居りける。
かくて吉次を毋に誘引て。地炕のほとりに對ひ坐して。いかう。年来の
志願を遂ぐかく環會まるふせられど。親子といくども。おのゝ〻その志とと為
めり。國の為ふ身の為にしくがつく。生しまへといふ。玉鳴笑て小首を傾け。と

こゝ迄も取ぬる身をゆるさばかうなさるゝ出せよとハそれ何を。といふも果ざるに
吉次ハ腰に着られ牛淵が。鎧頭巾をとり出し某が所存の一種ハさもあらバ
この頭巾のぬしなり。志りて留めおかれし欤。又志らで宿貸おかれしか何ハあれ朝
敵経高が軍師られ牛淵九郎清縄を舎義おひてハ浦二郎がうへも疑し
かくせバ。親子兄弟の義ハ絶なり。縛によりてハ弟にも縄をかけざれバ吉次が
軍監がうけあかりなれバひもなく。不忠の人となりぬべし。とても脱れぬ天罰
の。その首桶ハ頭巾の盃子藪首うけとらしてあつれとさし出せる玉澤ハ手に
なからひ給咲ひ。とハ思ひもかけぬ弟が子の難題にハ身より外さまが家に。
留め留ねとかふがひあふとも。監みかつし水鏡楚と認く所望の首級なけ
ちかざさめくのしあが。奥へ踏とゞ獨捕べし。いかにやいかにと詰よさねバ。
母もさかくの返答なく。ゐる塞ぞともとりぞら。折焚紫の跡しめくら吉次
焦燥て刀を引提つゝ立んとするを。折しも母ハ待まへ兄君。と呼びとめける。
浦二郎も物蔭よりかけ出養笠撥り捨て慌しく裡に入り。やがて
吉次に対ひていふやう。幼きときに別れたりし兄上にておわすれはしぞ。
只今彼処に窺ひて委細聞りぬ。理あれ頭巾の首桶との一瓢の酒に易て。
浦二郎にあたふれば。喜びおうける所なりと。述ながら瓢を兄にさしよすれ
バ吉次見て大に怒り。謂なき弟が截断。兄が携る瓢の狂水清縄が首
に易よとハ。いよく不審おゝかに汝も経高にゝ縁をはして。北條殿に怨
するとおぼし。忠義にハ骨肉ともおもひかへれハ武士の常なり。縛によりて
ハ弟といハさぬぞ。とく立と罵りて。瓢を把て投著れバ。酒にハあらで
裡より出たる吉次が小刀を。浦二郎撈とりて。叩ひ兄がほとりにさしおけば。
いかに兄上見まへりや。頭巾に易れとの小刀ハ。ナゾ切きられ父の像見とて


瀬川龍華に
牛浦と
戦ふ
牛浦九郎


瀬川うめ

遂しあへざらの短刀と一對なり。此牙牛淵が巾着をさげまへハ牛淵ハ此牙の小刀をさしけり。志かれバ是迄ハ羞あり。只浦二郎がはしきにまかして彼がゆて足に易志をしつゝ放しあふとも。敢忠義の闘ぶる事ふあらバ嚴刑おうくべし。といつせり。果して吉次ハ立ちに植さゝ。かくられ浦二郎只一つの小刀が惜ければ。追詰られ牛淵を放ちえて理なし。無益の勸解かゞに及ざそ。いで討とらんといひすゝて帯皆を返して奥のかたへ走り入らんとすれバ玉嶋膝でひざまづきてそれをしとて引袖が抑へ入又とり携ひ浦二郎を撲地と突退で岸破と蹴倒く蒸複が小楯にとり。牛淵九郎清縄がを引捉て立塞り。健気なり瀬川釆女これを見るが為のこと犬馬の労を竭さふめらバ。北條一家ハ古主三浦泰村わしの仇なり。初めて九州に跋跡して輙く大將實政が撃とつりとおもひの外却て汝に討られて不覚がきりなれとそ括をしけるが。

今汝が首を得て。今朝討したる吾士の冤魂を祀らずハ何の時を期すべき。とはげられおわざれて跳よ出。刃を閃して砍んとすれバ吉次飛退下て抜あはし。丁くと打あへど鬱せじとて浦二郎そこが牙を捕に玉嶋も左右と留むれども留めかねられ勇士の刀尖。とえてせんもべからりけるがかくて吉次清縄ハ奮撃突戦手を竭し。何果べらもあらざりしが牛淵やうやく腕撓太刀をらねひて拄踞れを。瀬川ハ蹴くりと踏とゞみて打入とまされど下と受透を鎹るに鍔窖に両刃膠めて離られざりし時に玉嶋傍より。山樫の衣板が合せて。打あはしるれ太刀の間へ礑と投かけ。その身が壁に喘ぐ。やよ待あ人と云。あれを互に逼ろ声がありたて。寄らふば牛淵に索をかけて遍らしあよ欤「いないかぞ清縄を縛ざるも寄らふば瀬川を禁しあふ欤「いなてがおもいよゝ撃しがとし。とぞうりにてハその身が下も云の値に引まれじ撃も撃ざれ

裁判いかゝこそすべけれといひも果ぬほとり近く落ちうる瀬川が小刀
ひらめきよりこゝろ咽喉へぐさと突ちられば足ばやと驚く牛淵瀬川浦二郎ハ
猶そこに固辞して。さまゝに勧れど玉造ハ極退く息吹吻とつゞけ。
より九年あまり。絶て在処もたゞざりし。才清縄又音耗ぜざりし我子未女
に。不思議ハ環會ぞかし。過世わしくて叔姪ども。敵身方と引さゝれ。鋼ハ
剛れ忠と義といづれをいづれとゝれるまて。かく好り果て玉嶋と牛淵が焼ゐり
やうれ。よも吉次ハ来かはいまちゝ驚れ。ちうらば敵ハ牛淵
九郎ハ。つゝ母のまゝまて吉次が為ぬ外藏の叔父ぬてありしっとゝくいくわと
ちゞし呆ぬて黙然ゝう。清縄そこの景迹ハ数回嘆息し。噫伯城かくあれ
ぎしとちゝ仰て浦二郎まつぶ心中をさぶえちし。吉次か打かけられ小刀と
信とし。瀬川が誘引ぬよしとゝひつれるもあハ雪のあれ果敢うれ巌期

なり。抑清縄今さらぶ武ら為とりて。鎌倉へ侍眉し。骨肉恩愛ハ絆さん
て。ひくいふあゝびれを是二浦泰村潜代の忠臣岬平馬清廉が二男
なれといふ。もして北條氏ハ密して。古主の怨を復さゞやとおりひ定めるる
にいある正元の夏長門なれ赤間関あて。姉ハ乳ぬしなゝ。てあゝびも向ぶ崎
あて。龍神の教誡と稟一巻の秘書ハさへ侍受せられ。且命運の尋ねを
ちつゝ。復讐のあハ心ぞはう。流紫ハ到て賣ト代生活とし忍れて
年を経ぬ。孫ちハ嫌されて。此度の大事にあれとゝも。紅ち鳥蓑
獣心はして。これと共ハ討れハ足ぶれ。されべとて一旦主従と形りくを違
背をゝれあゝぶ。所詮時宗が親族ゝ。実改うゝとも。ちうゝ風志を
果さゞやと尋思し。習ゝれ間謀の術をして。輒く謀深うとおりの
外。却吉次ハ謀られて。花蘭渡の屯代ゝ責敗られ。既小進退究まゝ。

あるに脱出まてくかくれも。舟玉嶋ホ環會。瀬川健三がゐ。又その子ども
のゐ所なくて。おりしめりをれホ。實政が軍監。瀬川采女吉次をつぐ蛭つれ
本を知覚しとても死をぐた清縄が首を。彼吉次ホ。ふたゝびせんとの所を潜て
浦二郎ホ忍ふ極を告。采女が打かけられ小刀をとし。矢田のかとへ遣しなるホ。
縛絶と相逃して。養育の恩を親ホも勝れ。姉の自害もされ故と。ゆくハ
いとで罪ゆるされ。弟の悪業を悔てかへらど。清縄ゆるされうとゆえなば絶言
が滅んるゆ。踵なやぐふをべかくれ。そしく驚て高名せよと。頂に伸と合巻
を。吉次を。じめて縁由なりて牛とく嗟嘆し。幼ときと二親の物語ホて
ゆれとあり。うう実母をそのじめ。領巾襞嶺の麓うれ濱添ゆしが
炊妾なれが。人間経紀と拐撃れて。彼地ホ呻吟。主人の憐愍をゆくそのの
家にゆりけるなまが父母鏡の神ゆ示現ホよりて側室し孫を産しの人を

とぞさてを赤間関ホて。悪根ホ棄ひ去られ。ゆくゆ離散しるひくれ民肥
母子年なれく。環會ゆれうひもゆく。名告れば互ゐ讐敵よしや忠義ハ立れ
こも。母と喪ひ叔父撃てハ。官位俸禄も何ゆせん若くれりのハ武士の。名のこそ
後の絆なれと。涙なゆ悔て撃かねくう。牛淵実て声なゆ。ゆ主とハ女しさゆ瀬川
采女。清縄と撃偏ぶしてハ。後の軍功ゆ。ゆくゆ忠義ますん逆やゆ。
浦二郎もゆ所ともに。ゆれ所撃て反逆の餘類を脱出。兄吉次ホ従ひく。
鎌倉殿の御威ホゆゆ。ゆくて刃と當ゐれぞ。とゆひ所せゆ浦二郎ハ瞋を
ちゆたくた。兄ハそもゆれ某をゆ。ゆくゆ仕ゐれそのうひハ。ホ所撃べと義ゆも已。
このうのこハ汗しゆくと。兼引手を立なかしゆ。牛淵大ふ焦燥く。彼も足
ものひゆひ。恩愛の已ゆくて。ゆゆ姉自害ホ立ども。清縄を撃ゆしく。
その死もスゆひなれホ似くゆ。いゆちゆ牛淵九郎ゆ刀の切ゆ試んとひと

めくどろとうぶ。腹へぐさと突たつれ。折しも門方ふ人ゆりて吹ときむ笛の音も。
はるのごろ龍の吟ぜれごとく。怪しそう形清縄が痩により。一道の雲霞蹴とくもち升
アと。又霏くと降る雪そ。遂ふ碎し玉の屑。或ハ神龍の空宙に戰ひて鱗を散もふ
異なるふぜ。親子同胞そ涙ともに。ふりそつとれが茅屋の檐の雪の鎖さに日光
かけて。吉次兄弟つと立めぐり。伴へ笠。岬龍村ハ龍神の子なれとなりて。その子孫今
に至て。腋下に黒子あり。形鱗ふ似ること。方に是祖先の血脈とのふ。とすの欲。ある奇なれども。奇なりと。瞬もせど
うち瞻れが母ハ苦しき息の下に。弟と子どもえとりて。ひし赤面関ふて。
人肉経紀ふ拐挈され。遠くとの肥の列ふ呻吟て。濱添の焚火とりしたりと。
春村ハ残黨なれハ。健三どの夫婦にもふ。親同胞をも故郷をも明白ふを
知ぬ。九年と経て今とに。孤ふ脱出ぬ者の悪業。古主のあふ捨れ命を。

何惜むぞ。ちろあれ子ゆえの闇に夜の鶏彼笛竹の音と生くふ数いやそえ
哀別離苦これも又道孝わ。本綿妙ぞの値偶の恩。復をとおりへいのく
に喜くはれとかた口説苦痛ふいとぐ潰れ鮮血ながふの涙なり。かくの吉次
も浦二郎も母のこ泣とおりひこみ。何といハ間の苦清水細れぐうれ王の緒ぞ。
撃もとめね絶雪ふ。ハ後ふ。と清縄を吉次ふ對て声と励。これ昭夜ふ
辺ふ追れられと。潜ふこれ相とれば辺遠かふぐ。漁倉ふ帰れ。
不慮の厄難あり。ふれ避れる基かし。只八の弓人をりてこれふ撃ばその
禍と脱れ。のこなふぐ。却不思議の功をうつ。とるぞ藤く。浦二郎ふ教く。
その意を汲さしたれば彼審にいふかれぐし。又ぐ龍神より伝受ぜ一巻と
伝へんの。山辺の外ふありともおぼえぞ。今面ゆう授んとすれば朝敵清縄
がまより。物ぞ受れの傷難ぞ厭ふかんよりてこの一巻ぞ浦二郎ふ

せ川うめ
せ川浦二郎
牛うち九郎
とかく倍左郎

さてれぞ速ふ元に贈りて。孝獅を全せよといひみて。彼一巻を拝領し出も
暁定めなく。首切るべきを貫の苦縮浦二郎とりて押戴たかくまて紙
理を拭おりひろげなどて鎌倉へ降ほし。後栄をかりのあざれといらせも果び
眼を睡そは何といふことぞ始めりて終なれい大丈夫の所為ふあるべいさ
吉次首とりて実改の實撿ふ使よといひつ刀を引まろせは門なれ笛を
忽地ふ吹止めて高ゆうに。鎌倉よりあん使と呼門声に吉次は怪豫ありて
冈うと刀の下ふ牛渕が首を膝下に撲地と落。共ふ倒るゝ玉嶋が刃を拔
ば息絶ぬ。吉次は目を押拭ひ刀とおりて牛渕が首級を紙巾に楚と押裹
注目されい浦二郎は走り出く折戸を開くふおりひもかけを博多倍太郎後者
僕よ二三人をおて横笛を雄をに走ろ。嬢てをゝみ入く上せふ押ろり吉次
に對ていふゆう。時宗朝臣火急のあ召ふよろそ。あん使どうみあり。夜を日ふ

徒く今曉到る鶴ふ実政ぬーに渇して牛渕没落のその外四辺の迹を
追ふて。こゝにまわり折しも。屋の上に雲氣あり。車の為体いと怪しけれど。
旅中の徒然と慰んとて携くられ笛を吹く試れふ潛龍庭より升て。雲ゝ
入れ歌のごと。當ふ牛渕ふ隠家なりと猜し。まず外面ふ立在て裡乃
容子を張へど。牛渕既ふ誅伏とこゝる見四辺の計策より出く。その功最
稱嘆るふ堪ゝ。勅權恩賜の錦の直無。内室秋布の淵息こゝにあり。受
おゝうて倍太郎とゝもに。鎌倉へとゝありのふ召し。と説示せば。吉次も謹ゝて
主命を受けるゝて遠来の賜を拜受し。又秋布が書翰を受ゝ。ゝく
いふゆう。俄頃ふ鎌倉へ右かゝるゝ。いまゝその是非をおりひろげ見ゝ
父ども。君恩かくまでふ深れい。わしも勤めのれべうぶ。ちうとも全く
朝敵と責滅し。九州を掃清ゝして鎌倉へかへるゝ。いし本意なれ所為

なれど。因縁もなれはしぬ。こゝに九年来遠離ゝ。実母玉嶋ゐ環會
なぐ。彼我ゐ仗て自害ーとゝんぬ。せめて野辺送の営をいとりぐ。
あの暇を放てせよ人ゐし。と希ふに。信太郎ゲて。かごうりけるゐ子細ゐ及ぶと。
あかくばこれハ矢田ゐ退てゝ彼ぐてゝゐ。こゝ為もぐうゐ葬と。ゐし果ゝゝと。
悲つ。これごもゝゝゐかくらし。徐くと立てゝ帰ゆく。折目正しく長袴の。
下括ゝ武士の。毛臑吹ゝれ雪風ゐ。踏吹の疲労ゲ勤てゝ式待ーてぞ
目送りゐ。

作者云。前編三冊稿成て。まづ刊行と。こゝに述れとと為。猶央て
過ぐ。これより以下。瀬川采女鎌倉ゐ赴く中途殃危ふ。あと。
及び瀬川浦二郎ゐ傳博多弥四郎瀧死の事。若黨俊平。蓑七
ゐ始終。秋布ゐ艱難苦節。終ゐ仇人嵐川嘉二郎。長城野兵太郎

擊て。名代海内ゐ高ー。その後俳優瀬川路考。采女夫婦ゐ忠節
心烈と。英才怜悧ゲ景慕ー。瀬川と号し賀村屋と家称せ。ゐの
終まで。果載続て後篇ゐ著とぐ。

今ゝ

松浦佐用媛石魂録前編下巻終

編述　著作藁案

出像　一柳斎筆

備書　石原駒知道

刊刻　小泉新八郎

右石魂録後編来年遅滞出版其余新編録千下

俊寛僧都嶋物語　曲亭主人著　来載出版

伊達與作驛馬新語　曲亭主人著　同　前

道二翁道話　六篇揃十八冊　筭法指掌大成　一冊

鳩翁道話　十八冊　月令博物筌　十六冊

二十四孝繪抄　前後二冊　鼎左秘録　一冊

陰隲文繪鈔　二冊　茶家醉古集　五冊

孝女操草　三冊　通俗武王軍談　二十冊

繪本楠公記　三篇揃　三十冊　通俗呉越軍談　十八冊

大坂書林　本町通心齋橋東入　河内屋真七板